

「肛門科」はおしりだけを診る科ではありません。おしりの病気だけでなく、お通じにまつわる様々な症状も直腸肛門専門医に診てもらいましょう。

肛門はサイズの的には決して大きい器官ではありませんが、この小さなエリアには実に多種多様な疾患が起こります。痔核、痔瘻、裂肛という3大肛門疾患は勿論のこと、腫瘍、炎症、性病などいわば目に見える疾患に加え、神経痛、失禁、排便機能の異常など外見は異常がない病気も数多く存在します。以前の古典的な「肛門科」は目に見える疾患だけ相手にしていれば良かったのですが、現代の「肛門科」はそれに加えて表面には見えない機能的な異常に対処することが求められます。

例えば様々な排便機能障害とりわけ、「便秘」です。便秘の定義は一定のものはありませんが、私は毎日排便が起きなければ便秘と考えています。ただし、「排便障害」は「便秘」だけではありません。便意はあるのに出口で便が出づらい、なかなかすっきりしない、おしりのあたりが痛くて排便も辛い、便をしてもまたすぐにしたくなる、このような症状は同じ便通の障害とは言っても、いわゆる便秘とは全く異なるものです。

が、このような排便機能障害は日本では医師にすらまだまだ十分認知されておらず、様々な排便障害の症状を医師に訴えても「便秘」として片付けられてしまい、わけもわからぬまま下剤だけ処方され片付けられてしまうケースは残念ながら決して少なくありません。このような「機能的疾患」は昨今、非常に増えており非常に辛い思いをされている患者さんが少なからずみえるのは悲しむべきことです。

当院では、比較的簡単な検査でその方の排便障害を診断し、できるだけその方の病態に即した治療を行うよう心がけています。下手な鉄砲は数を撃っても当たりません。正しい診断なくして正しい治療には決してたどり着きません。また、大方の肛門疾患はその発生に便通が大きな影響を与えています。

例えば、便秘や長便所は痔核や裂肛の原因に、下痢は痔瘻の原因になるのです。逆に言えば、理想的な排便をしていればまずそう間単におしりは壊れたりはしません。ですから、おしりを正しく診療するためにはまずその方の排便状態を把握し異常があれば正しておかなければなりません。おしりの具合が悪くなってもヤレ軟膏だのは治療としては二の次というわけです。売薬の軟膏や坐剤で治癒する疾病は基本的に存在しないと私は考えています。それで良くなるようなものは、大抵は放置しても良くなってしまふ類の疾病なのです。別に売薬が効いたわけでも何でもありません。ただし、痛みなどの自覚症状が幾分緩和されるということはあるかもしれません。

よく「おしりは手術をしてもまた悪くなる」と言われますが、これは適切な手術の後に末

永く排便管理を行わないためにそうなっていることが多く、正しい診断の下に正しい治療が行われかつ根気よく日々の排便を管理し続ければ、たいていの場合おしりは健やかに保てるものと思います。